

アメリカ公共図書館におけるコミュニティ論

—シンポジウム「コミュニティと図書館」(1943年)を中心に—

吉田 右子

(図書館情報大学)

はじめに

アメリカは植民地時代以来「自由」を最大に重視する個人主義を発達させる一方で、個人と国家の中間に位置する多層的な組織—コミュニティ—を生み出してきた国家である¹⁾。アメリカにおいて生活空間の共有と連帯感によって規定される地域共同体としてのコミュニティは19世紀半ばまで基本的生活単位であり、各コミュニティの持つ自律的な文化施設が機能することでコミュニティの社会生活が成立していた²⁾。そのようなコミュニティを中心とする社会的枠組みの下で、多くの公共図書館は情報提供と教育に関する継続的サービス機関として位置づけられてきた。しかしながら19世紀後半からはじまった都市化と情報化によって、地域性を越えた特定の連帯意識によって成立するコミュニティが増加し、地域的コミュニティの集団としての結び付きは弱まっていった。こうした社会変化は公共図書館にサービス対象としてのコミュニティをより明確に把握した上で自らの活動方針を決定していく姿勢を要求するようになった。以後、公共図書館は実践と理論の両側面からコミュニティ概念を討究してきた。

現在、アメリカの公共図書館は講演、集会、コンサート、地域会議、グループ学習など多様なコミュニティ・サービスを実施しており、図書提供サービスにとどまることなくコミュニティ構成員の情報活動・学習活動に

関する「総合サービス機関」として機能している。こうした多彩なコミュニティ活動を公共図書館界全体の方向性として定着させたのは、アメリカ図書館協会(American Library Association, 以下ALAと略記)の図書館政策によるところが大きい。ALAは1955年から1960年にかけて、コミュニティに関する基礎的研究である「図書館—コミュニティ・プロジェクト」に着手している。この1950年代のALAのコミュニティへの着目とコミュニティ分析作業は、1920年代から継続的におこなわれてきたコミュニティをめぐる多様な実践とコミュニティ研究の成果に基づいている。すなわち現在のアメリカ公共図書館を強く特徴づけているコミュニティ志向型図書館活動の理論的・実践的基盤は、その基点を公共図書館が啓蒙主義を主軸とした伝統的な図書館サービスから脱却し、コミュニティの社会的要請を満たすためのサービスをおこなうようになった1920年代に見い出すことができる。それゆえアメリカ公共図書館とコミュニティの関係を理解し今後の協同関係を考察していくためには、1920年代から現在にいたるコミュニティをめぐる図書館界の動向と図書館学におけるコミュニティに関する研究の蓄積に着目する必要がある。本稿では、図書館領域におけるコミュニティをめぐる提示された様々な論考を「図書館コミュニティ論」と呼称することにしたい。

図書館界において、すでに1920年代から30年代にかけてコミュニティをテーマとした複数の研究書が刊行された³⁾。しかしこの時期の図書館分野のコミュニティ論は、図書館におけるサービス対象のバックボーンとしてコミュニティ観を提示するにとどまり、図書館とコミュニティのかかわりを、両者が拠って立つ社会・経済・政治的基盤からとらえるような視点が希薄だった。その中でシカゴ大学大学院図書館学部(Graduate Library School, 以下GLSと略記)が1943年に開催したシンポジウム「コミュニティと図書館」ではコミュニティと図書館の影響関係が、図書館関係者を中心に社会学者・教育学者らによって多面的に討議された。本稿では同シンポジウムを図書館領域における最初の本格的なコミュニティ概念の討究の場としてとらえ、シンポジウム論文集 *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-*

28,1943⁴⁾をてがかりに、シンポジウムの意義を検討する。

2. シンポジウムの背景

本章では、シンポジウム開催にいたる 1940 年代までの図書館コミュニティ論の系譜をアメリカコミュニティ研究を参照しながら概観する。次にシンポジウムの社会的背景を考察する。

2.1 図書館学におけるコミュニティ論の系譜

コミュニティ研究でしばしば指摘されるように、コミュニティという術語の多義性は議論の曖昧さに結びつきやすい。実際にコミュニティ概念が討議される領域も社会学、政治学、哲学、歴史学、思想史など広範囲にわたっている。本節ではアメリカ社会学におけるコミュニティ論の理論的系譜を参照しながら図書館コミュニティ論の展開をみていきたい。

アメリカのコミュニティ研究は20世紀初頭の農村社会学における地域的集団調査からはじまり、そこでは工業化の影響による農村社会の変化をとらえ、農村生活圏を同定するための実証的な研究がおこなわれた。その後、農村を対象とする地域的集団研究は共同体の構成員と学校、教会、図書館などの施設との結びつきをみる生活圏分析アプローチへと発展した⁵⁾。

1920年代にはシカゴ大学社会学部において近代都市の社会関係を人間生態学という新しい視点で分析する都市社会学が創始された。シカゴ学派は現実に対する強い問題意識を持ち、産業化や移民による人口集中、都市膨張によってもたらされた社会問題を実証主義の精神と質的方法を重視する研究手法によって解明していった。フィールドワークの場として最適な要素を備えていた1920年代のシカゴを対象にしたエスニック・マイノリティや特定の社会集団に関する研究を通じて都市コミュニティ理論が構築された⁶⁾。

図書館とコミュニティについての研究がはじまったのは1920年代である。コミュニティ・サービス向上のためのパブリック・リレーションズの手法を討究したホイーラー(Joseph L. Wheeler)の*The Library and Community*:

Increased Book Service Through Library Publicity Based on Community Studies (1924年)⁷⁾や、公共図書館をコミュニティ情報センターへ再構築することを提起したラーネッド(William S. Learned)の *American Public Library and the Diffusion of Knowledge* (1924年)⁸⁾がこの時期の代表的著作である。公共図書館がコミュニティにおいて知的リーダーとしての役割を果たすべきであるというラーネッドの主張は、1938年にジョンソン(Alvin S. Johnson)による *The Public Library: A People's University* (1938年)⁹⁾においても強調された。ラーネッドとジョンソンの著作は、公共図書館をコミュニティの成人教育システムにおける中心的存在として認識したものの、図書館とコミュニティのかかわりを社会、経済、政治的基盤からとらえるような視点は希薄であり、むしろ図書館界を「コミュニティにおける公共図書館の果たすべき役割」という問題へと着目させるきっかけとなった点で意義があった。また図書館界では1910年から1920年代にかけて急増する移民のためにアメリカナイゼーション・プログラムを中心としたサービスが始まり、移民サービスを確立するため図書館界においてエスニック・マイノリティをめぐる議論が高まった。アメリカナイゼーション運動は公共図書館がコミュニティの学校や移民関係団体との結びつきを強める契機となった¹⁰⁾。

図書館学におけるコミュニティ論のもう一つの流れはシカゴ大学大学院図書館学部の読書調査である。GLSではシカゴ大学教育学部でおこなわれていた読書調査を1930年代から図書館学研究に取り入れ、読書行動のバックグラウンドとなるコミュニティを視野に入れた読書研究を発展させた。GLSでは開校当時から、図書館学部と他学部・学科(社会学部・教育学部・歴史学科・心理学科)との間で学部学科間共同研究(inter-departmental research)がおこなわれており、GLSは後期シカゴ学派の都市研究の手法を援用しながら図書館学独自の読書調査方法を精緻化したのである¹¹⁾。

GLSの読書研究はシカゴ大学教育学部からGLSに招聘されたウェイブルズ(Douglas Waples)を中心に進められた。ウィブルズの読書研究は「主題別に読書興味の程度が比較され、読書行動と読書興味の関係が追求され、また集団別の興味主題の比較も含まれる」ものであった¹²⁾。ウィブルズらを中心とする「シカゴ学派の読書研究は読書興味の実験・分析的研究、利用

者のアンケート調査の域にとどまらず・・・読書興味の背景となるコミュニティ構造の研究, いわゆる地域調査(community survey)に進み, 読書興味のバックグラウンドを研究しようとした」¹³⁾。具体的にはウェイブルズの「ニューヨーク南東部の貧困地帯の読書実態調査」, カーノフスキー(Leon Carnovsky)の「シカゴ市郊外の読書実態調査」が挙げられ, こうした研究はシカゴ大学社会学部の方法論的アプローチと社会調査に対する姿勢からかなり影響を受けていた¹⁴⁾。30年代のGLSにおける調査を通じて「読書行動」という視点からのコミュニティ研究はかなり進展していたといえる。GLS主催のシンポジウム「コミュニティと図書館」が, シカゴ大学ならびにGLSにおけるコミュニティ研究をベースとしていることはいうまでもない。1943年のシンポジウムはGLSとGLSに影響を与えたシカゴ大学社会学部を中心とするコミュニティ研究, さらに公共図書館のコミュニティ実践活動から導き出されたコミュニティ論が初めて一つの場で議論された学会ととらえることができる。

2.2 時代背景

次にシンポジウムが開催された当時の時代背景について言及したい。アメリカでは1940年代までに, TVA(Tennessee Valley Authority)に代表されるような社会改良を目的とした社会政策を通じて, 地方分散型政治形態の効果を体験した。このことは地域社会の向上を目指し積極的な社会活動の展開を試みる「コミュニティ・デベロップメント」への関心を呼び起こし, コミュニティにおける図書館の役割についての議論が高まった¹⁵⁾。

一方, シンポジウムが開催される前年の1942年に図書館界は戦勝図書キャンペーンを開始し, *Library Journal*において「図書館と戦時プログラム」常設特集記事の掲載をはじめた¹⁶⁾。コミュニティの図書館は戦争に関する情報センターとして再組織化された。

こうした戦時下の公共図書館の動向は当然のことながらシンポジウムでも主要なテーマとして取り上げられた。シカゴ大学教育心理学研究者のコーリ(Stephen M. Corey)は戦時下の高等学校教育について, 戦時労働委員会(War Manpower Commission)のスペンサー(William H. Spencer)は戦時体制

下の労働組合の組織化について報告した¹⁷⁾。民間防空局(Office of Civilian Defense)のロイ(Walter Roy)と戦時情報局(Office of War Information)のハート(Clyde W. Hart)は市民防衛と戦時情報について論じた¹⁸⁾。

戦時下の生活様式がコミュニティという単位を再び強調し、民主主義の牙城としてコミュニティがとらえられるようになっていったことも、この時期の図書館コミュニティ論に色濃く反映している。

3. シンポジウム「コミュニティと図書館」

シンポジウムでは、アメリカ公共図書館とコミュニティとの緊密性を前提とした上で、図書館とコミュニティの影響関係を検討するために、様々な角度から両者の関係が検討されている。本章ではまずはじめに論文集を概観し主要論文についてその内容をみていく。次に図書館領域におけるコミュニティ論の系譜の上で特に重要と考えられるカーノフスキーとマーティン(Lowell Martin)の各論文を取り上げて、論旨を詳しく検討する。

3.1. シンポジウム概要

論文集は民主主義社会と公共図書館の存在意義について、ライブラリアンシップの哲学を総合的に討究したカーノフスキー論文が巻頭におかれ、続く17の論文は各論者が専門領域からコミュニティ論を展開したものとなっている。

シンポジウムはGLSの主催であったためシカゴ大学から多くの研究者が参加した。中でもシカゴ学派として知られる社会学部の研究者は、自らの研究テーマに引きつけてコミュニティの諸相を明らかにした。都市生活について検討したワース(Louis Wirth)は都市的生活様式を地域構造、社会組織、社会心理の三つの側面からとらえアーバニズム理論を確立した社会学者である。論文集においてワースは伝統的なコミュニティの崩壊に伴う新しい地域社会の特徴を指摘すると共に、都市をめぐる諸問題を検討しながら大恐慌のもたらした社会変化についての分析をおこなっている¹⁹⁾。また

ナショナル・ハウジング・エージェンシーのアッシャー(Charles S. Ascher)が都市近郊について、シカゴ大学宗教社会学部のキンシュロ(Samuel C. Kincheloe)が小都市について、農務省のウィルソン(M. L. Wilson)が農村社会について各コミュニティの特徴を論じた²⁰⁾。

社会学者を中心とするコミュニティ研究者らがコミュニティの輪郭を社会学的に明らかにしていったのに対し、図書館関係者は多様なコミュニティタイプと図書館の関係性に着目して議論を展開した。デトロイト公共図書館のアルベリン(Ralph A. Ulveling)は大都市の図書館サービスについて考察した²¹⁾。アルベリンの所属するデトロイト公共図書館はミシガン大学・ウェイン大学、メルルパーマー・スクール、デトロイト美術協会などに図書館のコミュニティ・プログラムのために協力を仰ぎ、講演、就学前児童のためのプログラム、幼児のいる母親のためのプログラム、音楽観賞講座、高校生のための時事問題講座、テーマ別講座を実施していた²²⁾。

イリノイ州リバーサイド公共図書館のギルマン(Grace W. Gilman)は中規模都市にある公共図書館のコミュニティにおける役割に論及している²³⁾。ギルマンは大都市にない中規模都市の図書館のユニークな利点として図書館と利用者との緊密性を挙げた。一方でギルマンは中規模図書館が抱える問題として、スタッフが不足しているために成人教育にとって有効な図書館コミュニティ・プログラムを実施する時間が不足している点を指摘した。成人教育に多くの時間を費やすことで目録分類といった基本的な業務の時間が少なくなる危険性があった²⁴⁾。ギルマンは図書館が学校や成人教育グループの補助的存在としてインフォーマルな学習プログラムの企画に関わってきたことを示しながら、コミュニティ・フォーラム等を通じて図書館が成人教育においてリーダーシップをとっていく必要性を説いた²⁵⁾。

TVA 図書館サービスのロスロック(Mary U. Rothrock)は非都市地域の図書館の発展について検討した²⁶⁾。1943年にテネシー州の図書館担当部門は13の東テネシー地区の図書館活動を促進するためにノックスヴィルに図書館本部を設置した。この州によるサポート・プログラムは中央集権的な管理方式をとらず、各地区の図書館活動の部分的な援助をおこなった²⁷⁾。非都市地域の図書館の特性として、資料面では知的刺激に結び付くような資

料が少なく、新聞、雑誌あるいはドラッグストアで売られるような軽い読み物が多い点、利用に関しては読書に興味を持って図書館を利用するグループが限られている点が挙げられた²⁸⁾。ロスロックはTVA基金によるサポートを、学校と図書館の連携を促し地方の図書館事業を興隆させていくためのリーダーシップをもたらした点において評価し²⁹⁾、TVA政策による図書館サービスを発展させていく上での課題を次のようにまとめた。

- (1)農村コミュニティにおいて図書館利用を促進するためには、身近なテーマについての図書、映画、ラジオ台本といった様々な情報を利用者に届けるための資料頒布システムを形成することが最も重要である。
- (2)非都市地域の図書館には教育的機能が強く求められる。社会変動による教育範囲の拡大と職業状況の大きな変化は適応のための再教育を要求している。非都市地域において図書館は成人教育に関わる情報伝達の主要な手段となるべきである³⁰⁾。

図書館が非都市コミュニティにおいて重要な役割を果たしていくためには、図書館員はコミュニティにおける特定の問題に関連する情報を提供し、かつコミュニティの組織化に携わる専門家であることが期待されているとロスロックは述べた。これに答えるためには地域に根ざした問題解決を可能にする「非都市地域型ライブラリアンシップ」(rural librarianship)について現職教育の場が必要だった。ロスロックは図書館員のために大学院レベルの講習会やワークショップを開催して非都市地域図書館の発展の可能性を高めていく必要性を説いた。現職教育の場を通じて図書館員はコミュニティの置かれた状況や地域社会の構造上の特徴、コミュニティ発展への障壁とその解決策を専門家の指導のもとで研究する機会を持つことになるとロスロックは考えたのである³¹⁾。

シンポジウムでは公共図書館が主催する講演会、ディスカッション・グループ、地域評議会(communitiy council)についても論議された。クリーブランド公共図書館のマン(R. Russell Munn)は図書館主催の地域評議会について、シカゴ公共図書館のボランスキー(Edith Wolinsky)がコミュニティ・フォーラムについて、それぞれの図書館での実践例に即して図書館のコ

コミュニティ・プログラムの現実を報告し、図書館にとっての意義を検討した³²⁾。また上記のようなコミュニティ活動実施にあたってコミュニティを様々な角度から理解していくことは欠かせない。そのための予備的作業であるコミュニティ・サーベイについては、シカゴ大学の社会福祉を専門とするマクミレン(Wayne McMillen)とGLSのマーティンが考察をおこなった³³⁾。

3.2. カーノフスキー論文「国家とコミュニティの図書館」

論文集の責任編集者であったカーノフスキーの巻頭論文「国家とコミュニティの図書館」³⁴⁾は民主主義社会における図書館と国家の位置関係を示しながら、図書館活動の理念的背景と民主主義への貢献を目的とするコミュニティの図書館の存在意義の解明を目指すものであった。同論文はシンポジウムの思想的基盤となる論考である。本節では論旨を追いながらカーノフスキーの公共図書館思想を検討する。

カーノフスキーはまず図書館を構造と機能のみから考えるだけでは、理論的發展に限界があると指摘した上で、論文の目的を(1)図書館運動の理念的背景と民主社会における図書館と国家の位置関係、(2)民主的理想の維持に対して貢献する社会的機関としてのコミュニティ図書館の役割を明らかにすることの二点にしぼった³⁵⁾。カーノフスキーは国家機関である図書館を論じていくためには国家を理解することが欠かせないと述べた上で、行動規範者、行動監視者としてネガティブなイメージでとらえられてきた国家のイメージは公共図書館と国家を考えていく上で妥当な解釈とは言えないと指摘した。人間が社会的、政治的存在である限り、国家が高度な社会的発展や生活を形成する媒介的機能を果たす。国家という組織化された社会において個人は高められるのであり、国家は人間のモラル、知性、精神力をより高めていくために存在している。ゆえに図書館員は国家を法や秩序で制限するものとしてではなく、個人の発展を可能にする機構として認識すべきであるとカーノフスキーは主張する³⁶⁾。

カーノフスキーは民主主義国家を個人の自由を最大限に実現するための装置と規定し、また個人を最高のものと認識する価値としてとらえた。民主主義の下で個人の自由は、政府によって提供される特定の制度と制度が

市民にもたらす恩恵によって現実のものとなるのであり、コミュニティの図書館は民主主義社会の持つ自由達成のためのきわめて優れた機関の一つである³⁷⁾。続いてカーノフスキーはジェファースン(Thomas Jefferson)の民主主義の概念までさかのぼって民主主義思想における民衆教育の重要性を指摘した。そしてジェファースンの思想の中に「市民に対して自由をもたらすために、国家は教育という手段を用意するのであり、教育を通じてのみ人は理性に従って自由を達成することができる」という民主主義思想の原点を見い出している。カーノフスキーは民衆教育を自由や真の民主主義へ続くプロセスにとらえ、精神の自由化を目的とする教育には人類の思想的源泉である著作物へのアクセスが含まれると指摘して、図書館の存在理由を明示した³⁸⁾。

図書館の本質的機能は、社会的問題や議論について様々な角度から書かれた資料を利用者のために用意することにある。図書館は啓蒙の源泉であり、誤ったプロパガンダや虚偽、不正と戦う場所であった。公共図書館は多様な政治、経済、社会的主張を排除することなく有用な真実を伝播することによって、民主主義に対して積極的な貢献をしている。静的で平和で無害な場所という従来の図書館のイメージは否定すべきであり、図書館はアメリカ文明において最も重要な知識集積にかかわるダイナミックな場所ととらえる必要があった³⁹⁾。

マスメディアの隆盛と共に、真実の伝達や知識を深めていく社会機関としての図書館の潜在的役割はかつてないほど重要なものとなり、公共図書館が民衆の知識への真の覚醒に対して責任を持つ機関として認識されるべき時期が来ていた⁴⁰⁾。コミュニティの図書館が果たしていく役割としてカーノフスキーは次の二点を挙げた。(1)公共図書館はコミュニティの関心事や興味点を理解し、コミュニティの意志を図書館活動に反映させる。(2)多様な意志が混在するコミュニティにあって図書館員は知的リーダーとして衝突しあう意志に対し、批評的態度をとることも含め、より積極的な行動をとる⁴¹⁾。

カーノフスキーは図書館がすべて同質的存在としてみなされていることに批判的であり、基盤となる政策においてばかりか、政策理解の方法にお

いても図書館は個々に異なっていると主張した。公共図書館活動のスタンダードとよべるようなものは存在せず、それぞれのコミュニティ関係の中で、各コミュニティは独自の図書館像を構築していく⁴³⁾。国家の在り方は個々のコミュニティの在り方に依存するものであり、その傾向は戦時下においてますます顕著になり地域の独立性が高まっていた。こうした状況を受けてアメリカのライブラリアンシップが社会に対しておこなう崇高な貢献は、各館における集団的努力によってもたらされると考えられた。カーノフスキーは、規模の大小にかかわらず各図書館がコミュニティにあって人々に対し真実と啓蒙の中心的機関として機能することで、アメリカのライブラリアンシップが民主主義の伝統の維持に寄与していくと結論づけた⁴³⁾。

3.3. マーティン論文「図書館とコミュニティ分析」

次に図書館のためのコミュニティ・サーベイについて討究したマーティン論文⁴⁴⁾をみていきたい。公共図書館サービスの効果を高めるために、コミュニティ理解が重要であることはすでに1920年代から図書館界において共通認識となっており、コミュニティ調査も実施されていた。しかしシンポジウムにおいてマーティンはコミュニティ・サーベイの目的や意義を実際の方法と共に始めて明確に提示した。カーノフスキーによる理念的なコミュニティ論と共にマーティンの議論は、方法論の側面から図書館学における新しいコミュニティ論の構築に寄与している。

マーティンは最初にコミュニティ分析とはサービス対象地域の読書ニーズを同定することであると定義した。コミュニティ・サーベイを実施し、調査結果をサービス・プログラムへ適用することは公共図書館活動の重要な要素だとマーティンは認識していた⁴⁵⁾。

マーティンは図書館コミュニティ・サーベイの問題点・限界点といった否定的な面から検討をはじめ、課題として三点を挙げた。まず第一番目にコミュニティ・サーベイの結果がそのまま図書館の目的を決定することはなく、調査は図書館サービスのための一手段にすぎない。またコミュニティ・サーベイの結果を図書館活動に反映させていくかどうか、また反映

の度合いは図書館が明確な方針を持って決定すべきである。第二番目にコミュニティ・サーベイから出てくる統計値によってコミュニティ生活のすべてを理解することはできない。コミュニティ理解には統計的・横断的なアプローチと社会的相互作用的なアプローチがあり両者は補完的に存在しているため、統計的要素だけでコミュニティ評価をすべきではない。第三番目にコミュニティ・サーベイはコミュニティの読書傾向に関する理解を限定してしまう可能性があった。マーティンは読者の社会的立場と読書傾向は必ずしも一致しないと主張し、こうした誤った理解はデータ不足、読書研究の断片的適用、分析者の固定観念に起因すると述べた。以上の理由からコミュニティ・サーベイには限界があつて、調査結果はそのまま図書館活動に反映すべきではない⁴⁶⁾。

コミュニティ・サーベイの最大の効果は図書館がそれまでに作り上げてきた限定的なコミュニティ観を打破する点にあつた。マーティンは図書館は利用者の声に耳を傾けサービスに反映させてきたものの、それが真のコミュニティの意見であるかどうかは不確かであると指摘する。図書館からの視野はインフォメーション・デスクから見える範囲に留まっているからである。しかしながらコミュニティ分析によってトータルなコミュニティ像を描きだすことが可能となる。コミュニティ・サーベイの別の利点としてコミュニティ内の団体との連携が考えられた。予算を押さえながらサービスを拡張するためには共通の関心を持つグループを同定し、グループ単位でサービスを展開していく方法が有効であり、そうしたサービスを計画していくためにはコミュニティ調査が不可欠であつた⁴⁷⁾。

マーティンはコミュニティ・サーベイをいくつかの段階にわけて把握することを提唱した。まず最初におこなうのは包括的サーベイであつて、この段階では分析対象の全般的な把握に重点を置く。次にコミュニティ内に存在する社会グループについて綿密な調査を実施する段階がある。最終段階では読書ニーズに着目して分析作業をする。読書興味に関してはしばしば郵送アンケートがおこなわれてきていた。しかしこの方法が断片的な結果を導きやすいことをマーティンは警告し、最終段階の読書調査は包括的かつ徹底的なものでなければならぬと注意を促した⁴⁸⁾。

コミュニティ・サーベイのための情報源の具体的な項目として観察、統計、歴情的情報源、人的情報源が挙げられた。観察とは図書館員が自らの足を使って図書館周辺地域を把握する方法であり、コミュニティ・サーベイの基礎作業として位置づけられた。直接観察することによって図書館へのアクセスの利便、周辺地域の経済レベル、居住の様子を読み取ることができる。観察の目的は最終的な情報を入手することではなく、観察者の調査の方向付けを助け、他の情報による調査へと発展させていくことにあった⁴⁹⁾。

コミュニティ・サーベイにとって重要な情報源になる多種の統計に関してマーティンは商務省国勢調査部が出している統計データを推奨する一方で、図書館の登録、貸出記録の重要性を強調した。シカゴ公共図書館分館は登録者記録から性別、歳、学歴、職業、居住区などのデータを分類し、コミュニティ情報として役立てていた。図書館利用者は必ずしもコミュニティの代表者とはいえないものの、図書館利用者グループを読書コミュニティとしてとらえることが可能であり、図書館の持つ様々な記録はコミュニティ・サーベイの重要な情報源となりうる⁵⁰⁾。

次にマーティンは歴情的情報源に言及した。観察やカレントな統計から得られた共時的データの史的背景を地方紙、歴史研究団体などの歴情的情報源によって補完することでコミュニティの状況がより明らかになっていく⁵¹⁾。人的情報源は統計で得られた情報と現実とのギャップを埋める目的で、調査の最終段階に役立てられた。人的資源を使った調査は二つの段階が必要であった。第一段階は牧師、校長、会社経営者などコミュニティの主要な機関にかかわる人物からのヒアリングである。同時にソーシャルワーカー、セツルメントのスタッフ、労働組合のオーガナイザーといったコミュニティのより深部の生活状況についての情報を持つ人々からのヒアリングも重要な情報収集の手段であった。人的資源に基づく調査は、第一段階で収集された情報をもとに第二段階で組織グループについての詳しい調査を実施するという二段階のプロセスを踏んで完成されることになる⁵²⁾。より完全なコミュニティの構図を描くためには、様々な情報源を綿密に分析、評価、統合する必要性があった⁵³⁾。

マーティンは論文をまとめるにあたってコミュニティ理解のための項目として、(1)コミュニティにおける社会的、宗教的、経済的自給度、(2)コミュニティにおける人種、宗教、経済をめぐる軋轢、(3)コミュニティ構成員のコミュニティへの帰属感や信頼度を挙げた。このような質問に対して回答を与えるためには統計的データを越えた地域理解が要求された。回答が可能であれば、コミュニティ分析の最初の作業が完成し、調査の視点をコミュニティ全般的な考察から特定グループの読書興味に移行すべき段階がきていた。マーティンはコミュニティ分析は非常に労力のかかる大規模な作業であって短時間の調査からは断片的な情報しか得られないと指摘する。しかしながら図書館関係者が共有する高度な理想としての「コミュニティ図書館」を確立するために、コミュニティ分析は非常に重要な役割を持つものだと強調した⁵⁴⁾。

4. 考察—シンポジウムの評価と位置づけ—

本章ではシンポジウムの考察をおこなうと共に図書館コミュニティ論の形成という視点からシンポジウムの位置づけを検討する。

論文集の責任編集者であったカーノフスキーはシンポジウムの成果を以下の八項目にまとめた。

- (1)公共図書館は情報伝達と啓蒙のための機関である。
- (2)公共図書館が情報伝達と啓蒙を達成していくための最も効果的な手段は図書の供給である。
- (3)図書館は図書提供だけでなく図書利用を奨励する責任がある。
- (4)図書という物理的形態よりも、その中身—知識—が重要である。
- (5)図書館が組織してきたフォーラム、ディスカッション・グループ、地域評議会はコミュニティ・国家・国際レベルの問題に対する理解を促し、コミュニティ内の問題を解決することを目的としている。
- (6)図書館が企画するプログラムは読書促進が意図されている。しかしながらそれらの諸活動が読書に結び付くとは限らない。
- (7)図書館のサービス・プログラムの効果を高めるために、コミュニティ

理解が不可欠である。図書館は人種構成や経済レベルなどの一般的統計データの背後にあるコミュニティの文化的伝統やコミュニティ内の公式・非公式組織を把握すべきである。

- (8)各コミュニティはそれぞれに異なった存在であり、図書館の活動プログラムを定型化することはできない⁵⁵⁾。

以上の八点は多様な学問的背景を持つシンポジウム参加者の論点を総括した結論といえる。これらのポイントを念頭に置いて、以下シンポジウムについて考察を進めていく。

まず、シンポジウムに対する評価からみていくことにしたい。シカゴ公共図書館のローデン(Carl Bismarck Roden)はシンポジウムについて次のような意見を述べている。アメリカ公共図書館は図書館の社会的基盤を模索し続けている。公共図書館の初期の理想は民衆教育のための機関となって読書活動を振興させることであった。この初期の目標がある程度まで達成された現時点では公共図書館が次にすべきことが問われている。その答えが、公共図書館の企画するフォーラム、地域評議会、映画、ラジオ、リサイクル、グループ活動にある。シンポジウムは図書館運営と図書館サービスに対する新しい方法論と新しい理想についての展開を示している。ローデンは公共図書館がその社会的責任を明確にしたい、そしてその責任を果たす上での図書館の可能性を示したい、という願望に支えられた長年にわたる探求史に対し、シンポジウムが価値ある貢献をしているととらえたのである⁵⁶⁾。

公共図書館と成人教育の発展についてまとめたストーン(Walter Stone)は戦時下で図書館界が一丸となって戦勝サービスに打ち込んでいる状況で、同シンポジウムが戦争への具体的な政策よりむしろコミュニティ理解の重要性を図書館員の責務として強調している点に着目している。危機的な状況に対峙した時、図書館はコミュニティに密着したサービス姿勢を貫くことで社会的責任を果たしていくべきであるという図書館界の強固な意志をストーンはシンポジウムの議論の中から読み取っている⁵⁷⁾。

シンポジウムはコミュニティというテーマを掲げながら議論の内容には公共図書館における成人教育が深くかかわっている。リー(Robert Ellis Lee)

によれば図書館界のコミュニティへの着目は、1880年代から1890年代に図書館とコミュニティとのコンタクトを密接にするために導入された三つのサービス(1)読書相談サービス、(2)娯楽を目的とした読書のためのサービス、(3)レファレンス・サービスと関連づけられはじまった。1897年までにアメリカ公共図書館はコミュニティの社会機関として確立し、図書館員の個人読者に対する関心と、コミュニティの成人の自己教育を奨励する図書館の役割を明らかにしたいという図書館員の希望が図書館サービスの方向性を決定していった⁸⁸⁾。1940年代に入ると図書館の教育的役割について認識も高まり、公共図書館は独自の成人教育プログラムを主催してコミュニティにおいて活力のある成人教育機関になりうるという考え方が浸透していった⁸⁹⁾。コミュニティ・サービスが盛んになった背景には、戦時体制の下で経済的理由やスタッフ不足といった理由から個人サービスが困難になってきたという実質的な理由もあった⁹⁰⁾。このような経緯とも相俟って公共図書館界は成人教育という抽象的な目標をコミュニティという具体的な対象を定めることでよりの確に実施し、活動として深めていくべく、40年代を境に個人からグループへとサービス対象を転換したのである。

1940年代以降、公共図書館はフォーラム、コミュニティ会議、映画、ラジオ、リサイタル、グループ活動などを企画し実施するようになった。論文集でクリーブランド公共図書館のマンが「図書館主催の地域会議」について、シカゴ公共図書館のボランスキーが「図書館主催のコミュニティ・フォーラム」について論じ、両者ともプログラムの効果を高く評価している。同シンポジウムでは公共図書館成立当初から目標としてきた「成人教育機関としての図書館」をコミュニティに引きつけて達成していくための実践方法や実践を支える理念が提示され「図書提供サービス」以外の図書館サービスに対する新しいテクニックとその方向性を示唆することになった。公共図書館が図書を中心としたサービスを越えて様々な試みを行なうことに対しては1930年代以来、伝統的サービスの維持という観点から保守的な図書館員を中心に批判があった。しかしながら公共図書館がコミュニティを意識しながらその社会的責任を果たしていくことの重要性が、この時期に図書館界全体の共通認識となり、シンポジウムはそのことを確認す

る場となったのである。

図書館とコミュニティをめぐる多層的な関わりを提示しているシンポジウムの意義を筆者は次の三点としてとらえた。

(1)戦時下のきわめて特殊な社会状況の中で「コミュニティ概念」を手掛かりに公共図書館というものを捉え直そうとする試みがなされた。これはカーノフスキー論文に顕著にあらわれている。カーノフスキーは個人、コミュニティ、国家がいかなる関係で結ばれているかを整理し論じた上で、この三者によって形作られているアメリカ社会の中に公共図書館を明確に位置づけた。カーノフスキー論文は、個人と共同体の微妙なバランスの上に成立するアメリカ社会の在り方を反映し、そこには公共図書館が矛盾する二つのイデオロギーの掛け橋となるような構図が提示されている⁶¹⁾。カーノフスキーの視点はあくまでも古典的なコミュニティ観におかれており、シンポジウムの他の論文が図書館とコミュニティの新しい関係性を探究するような議論を展開している中で、少し異質な印象を受ける。しかしながら他の論文が議論の前提としているコミュニティと図書館の結び付きをあえて問い直すような内容をもっており、図書館コミュニティ論の思想的基盤として非常に重要なものといえる⁶²⁾。

(2)コミュニティの特質を踏まえた図書館サービスの重要性が示唆された。またコミュニティの規模別の図書館サービスの在り方が論じられ、コミュニティ理解の前提となるコミュニティ調査に対して、より詳細な分析項目を付加する必要性が提唱された。

各コミュニティはコミュニティとしての特質を持ち公共図書館のコミュニティ・サービス・プログラムを定型化することはできないという結論は、大都市、中都市、小都市、農村地区といったコミュニティの規模別にコミュニティと図書館について考察した論文によって導かれた。たとえばマーティン論文は1950年代以降のコミュニティ・プランニングの土台となるような実質的な理論を提唱している。ロスロックはTVAという大規模な連邦の政策が地方コミュニティにおける図書館の在り方にいかなる影響を与えたのかについて詳細に検討し図書館活動をコミュニティ・デベロップメントという立場からとらえている。

(3)コミュニティのボランティア・アソシエーションと公共図書館の関係が多面的に分析された。トクヴィル(Alexis de Tocqueville)がアメリカ社会の特徴として指摘した「自由団体」(free institution)、結社(association)はすでに17世紀からアメリカ社会に存在しコミュニティを特徴づけてきた。アソシエーションを特定の目的を持って一定の関心を追求する集団としたマッキーバー(Robert Morrison MacIver)の定義は、アソシエーションをコミュニティの対置概念とすることでその社会的性格を明確にした。コミュニティの地域的特性が薄れるに従いアソシエーションの中でも自発的意識によって結びつく「ボランティア・アソシエーション」—はアメリカ社会において非常に重要な位置づけをしめるようになった。ボランティア・アソシエーションは初期の地域的組織から全国規模組織へと機構の変化を遂げたが、その実質的な活動はコミュニティを基盤として行なわれ、地域住民を横断的に結びつけている⁶³⁾。ボランティア・アソシエーションを特徴づける「自発性」「国家と個人の間集団」「成人教育的機能」といった概念は公共図書館活動と重なりあうところが多く、コミュニティにおける図書館を考えていくとき両者の関わりが非常に重要になってくる。実際にボランティア・アソシエーションが図書館という場で活動を展開している例もあり、両者の関わりがコミュニティと図書館を結び付けるひとつの鍵となっていた。シンポジウムではアソシエーションとの多段階的なかわりが報告され、アソシエーションと協同関係を作り上げていく可能性が論じられた。

5. おわりに

シンポジウムは図書館を中心としたコミュニティ論を軸に、都市社会学を確立した社会学シカゴ学派に属する社会学研究者も交えて学際的な議論がなされた場であった。ただし、シカゴ学派のメンバーはここではあくまでも社会学を中心とするコミュニティ理論の最新の成果を示しながらアドバイザー的な役割を果たしたととらえるべきであろう。一方、図書館関係者のコミュニティ論は各図書館における活動経験から導き出されたもので

あり、シンポジウム全体として見れば公共図書館の成人教育活動を「コミュニティ・サービス」という方向性を持たせて実施していこうとする図書館界の動向を強く反映したものとなった。GLSの研究者が両者を融合するような理論を展開していたとはいえ、シカゴ学派の社会学的アプローチがシンポジウムの議論のベースになっていたとは考えにくく、この点が研究集会の開かれた1943年時点での図書館コミュニティ論の方法論的限界を示している。しかし1920年代にホイーラーやラーネッドによって指摘された「コミュニティに着目した図書館サービス」という概念が、このシンポジウムで多様な領域から検討されることでより精緻化されたことはシンポジウムの成果として十分に認められるものである。

本稿は図書館コミュニティ論という枠組み自体を明確にするために、シンポジウムの中でも特に図書館コミュニティ論の理論的基盤を提示したカーノフスキーとマーティンの論文に焦点をしばって考察した。ゆえに実践レベルでの図書館コミュニティ活動をコミュニティの実態と重ね合わせ検討するという作業を十分に展開することはできなかった。しかしながらこの時期にコミュニティの図書館が多岐にわたるコミュニティ活動を積極的におこなっていたことはアルベリン、ギルマンらの論文から明らかであり、また非都市地域において、図書館活動とコミュニティの発展が特に密接に結びついていることはロスロック論文で指摘された通りである。シンポジウムで提示された論点が1950年代に本格的に始まるALAのコミュニティ政策に様々なレベルで吸収されていったことも含めて、シンポジウムは1920年代から討究されてきた「公共図書館サービスの基盤としてのコミュニティ」を再方向づけした重要な節目として公共図書館史上に位置づけることができる。

注・引用文献

- 1) (a) 本間長世「アメリカ人のコミュニティ観」『アメリカ社会とコミュニティ』本間長世編 日本国際問題研究所, 1993, p. 1-35. (現代アメリカ, 2)

- (b) 能登路雅子「地域共同体から意識の共同体へーアメリカ的コミュニティのプロ
ンティア」『アメリカ社会とコミュニティ』本間長世編 日本国際問題研究所、
1993, p. 173-206. (現代アメリカ, 2)
- 2) 同書, p. 178-179.
- 3) (a) Wheeler, Joseph L. *The Library and Community: Increased Book Service Through
Library Publicity Based on Community Studies*. Chicago, American Library Association,
1924, 417p.
- (b) Learned, William S. *American Public Library and the Diffusion of Knowledge*. New
York, Harcourt, 1924, vii, 89p.
- (c) Johnson, Alvin S. *The Public Library: A People's University*. New York, American
Association for Adult Education, 1938, ix, 85p.
- 4) Carnovsky, Leon and Martin, Lowell eds. *The Library in the Community: Papers Presented
Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*, Chicago,
University of Chicago Press, 1944, 238p.
- 5) 松原治郎「コミュニティ論の系譜」『コミュニティ』松原治郎編 至文堂, 1973,
p. 55-56. (現代のエスプリ, 68)
- 6) 矢崎武夫「シカゴ学派の都市研究動向ー人間生態学を中心にー」『都市化の社会学
理論ーシカゴ学派からの展開』鈴木広, 倉沢進, 秋元律郎編 ミネルヴァ書房,
1987, p. 44-75.
- 7) Wheeler, *op. cit.* 3) (a)
- 8) Learned, *op. cit.* 3) (b)
- 9) Johnson, *op. cit.* 3) (c)
- 10) 小林卓「今世紀初頭のアメリカにおける移民へのサービスーアメリカナイゼー
ション運動との関わりでー」『社会教育学・図書館学研究』第17号, 1993, p. 23-33.
- 11) 吉田右子「シカゴ大学大学院図書館学部における研究の概念ー創設期を中心にー」
『図書館学会年報』Vol. 38, No. 4. Dec. 1992, p. 160.
- 12) 河井弘志『アメリカにおける図書選択論の学説史的研究』日本図書館協会, 1987
年 p. 277.
- 13) 同書, p. 269-270.
- 14) 同書, p. 271.
- 15) Broom, Herbert. "Adult Services: "The Book That Leads You On"," *Library Trends*.
Vol. 25, No. 1, July 1976, p. 385.
- 16) Williams, Patrick. 『アメリカ公共図書館史: 1841年ー1987年』[*The American Public
Library and the Problem of Purpose*] 原田勝訳, 勁草書房, 1991, p. 72-75., 第二次世界
大戦における図書館政策については村上論文に詳しい。村上美代治「第二次世界大
戦とアメリカの図書館活動ーアメリカの世界戦略と図書館政策ー」『大図研論文集』

第15号, 1989年6月, p.123-133.

- 17) (a) Corey, Stephen M. "The High School and the War" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 119-133.
- (b) Spencer, William H. "Organized Labor As a Community Force" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 165-175.
- 18) (a) Roy, Walter. "The Community Defends Itself" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 146-164.
- (b) Hart, Clyde W. "Keeping the Citizen Informed in Wartime" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 176-189.
- 19) Wirth, Louis. "Life in the City" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 12-22.
- 20) (a) Ascher, Charles S. "The Suburb" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 62-75.
- (b) Kincheloe, Samuel C. "Life in the Small City" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 76-89.
- (c) Wilson, M.L. "Life in the Country" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 98-109.
- 21) Uveling, Ralph A. "The Public Library in the Large Community" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 23-37.
- 22) *Ibid.*, p. 36-37.
- 23) Gilman, Grace W. "The Community Role of the Public Library in Middletown and

- Suburbia" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 90-97.
- 24) *Ibid.*, p.91-92.
- 25) *Ibid.*, p. 96.
- 26) Rothrock, Mary U. "Library Service to the Rural Community" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 110-118.
- 27) *Ibid.*, p. 110-111.
- 28) *Ibid.*, p. 112.
- 29) *Ibid.*, p. 115.
- 30) *Ibid.*, p. 116-117.
- 31) *Ibid.*, p.117-118.
- 32) (a) Munn, R. Russell. "A Library-Sponsored Community Council" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 38-47.
- (b) Wolinsky, Edith. "A Library-Sponsored Community Forum" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 48-61.
- 33) (a) McMillen, Wayne. "The Community Survey" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 190-200.
- (b) Martin, Lowell "Community Analysis for the Library" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 201-214.
- 34) Carnovsky, Leon. "The State and the Community Library" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. 1-11.
- 35) *Ibid.*, p.1
- 36) *Ibid.*, p. 2.

- 37) *Ibid.*, p. 5-6.
- 38) *Ibid.*, p. 6-7.
- 39) *Ibid.*, p. 8.
- 40) *Ibid.*, p. 8-9.
- 41) *Ibid.*, p. 9.
- 42) *Ibid.*, p. 10-11.
- 43) *Ibid.*, p.11.
- 44) Martin, *op. cit.* 33) (b) p.201-214.
- 45) *Ibid.*, p. 201.
- 46) *Ibid.*, p. 201-203.
- 47) *Ibid.*, p. 203-204.
- 48) *Ibid.*, p. 206.
- 49) *Ibid.*, p. 207-208.
- 50) *Ibid.*, p. 208-210.
- 51) *Ibid.*, p. 211.
- 52) *Ibid.*, p. 211-212.
- 53) *Ibid.*, p. 212-213.
- 54) *Ibid.*, p. 213-214.
- 55) Carnovsky, Leon and Martin, Lowell. "Foreward" *The Library in the Community: Papers Presented Before the Library Institute at the University of Chicago, August 23-28, 1943*. Leon Carnovsky and Lowell Martin eds. Chicago, University of Chicago Press, 1944, p. iv-v.
- 56) Roden, Carl Bismarck. "Library Books Reviewed," *Library Journal*. Vol. 70, No. 3, Feb. 1, 1945, p. 115-116.
- 57) Stone, C. Walter. "Adult Education and the Public Library," *Library Trends*. Vol. 1, No. 4, Apr. 1953, p. 444.
- 58) Lee, Robert Ellis. *Continuing Education for Adults Through the American Public Library 1833-1964*. Chicago, American Library Association, 1966, p. 29.
- 59) *Ibid.*, p. 80-81.
- 60) *Ibid.*, p. 82-83.
- 61) 本間, 前掲 1) (a), p.1-35.
- 62) カーノフスキーの民主主義観については, 選書論との関わりで詳しく論じられている。河井, 前掲 12), p.216-226.
- 63) 能登路, 前掲 1)(b), p. 181-190.